

# マルクスのステュアート評を考える\*

## 価値の観念性について

泉 正樹†

### はじめに

マルクスによるステュアートの計算貨幣論批判は、ステュアートが計算貨幣というかたちで提示した価値そのものという概念、商品の使用価値からは独立して存在しうる価値、言い換えれば、価値の観念性を批判するものであるように思われる。

『経済学批判』において行なわれているマルクスのステュアート評は、価値とは観念的なものではなく、価値とは、具体的有用労働を通して諸商品に体现される抽象的人間労働に他ならないという、自身の価値概念を際立たせる効果が意図されているものとして読むことができる。

そこでなされている議論は、そうした効果を発揮しているかどうか、この点を考えてみたい。

## 1 スチュアートの計算貨幣論

### 1.1 計算貨幣と鑄貨としての貨幣

ステュアートによれば、「鑄貨としての貨幣」(Steuart[1767]p.214., 訳 5 頁)とは区別されるもう一つの貨幣概念があるのだという。ステュアートはそれを「計算貨幣 (money of account)」ないし「観念的貨幣 (ideal money)」(Steuart[1767]p.217., 訳 8 頁)と呼んで、以下のように説明している。

「私が計算のための貨幣と呼ぶものは、販売品のそれぞれの価値<sup>1)</sup>を測定するために発明された、同等の部分からなる任意の度量標準 (scale) にほかならない。それゆえ計算貨幣は、鑄貨としての貨幣とは全く別のものであり、すべての商品にたいして適切で比例的な等価物となりうる、何らかの実体というべきものがこの世になかったとしても存在しうる。」(Steuart[1767]p.214., 訳 5 頁)

---

\* CIRJE 政治経済学ワークショップ (2007 年 3 月 17 日)

† 浦和大学短期大学部 非常勤講師 (cxe02417@nifty.com)

1) 邦訳書では「それぞれの価値」の部分は「相対的価値」と訳出されているが、「..., invented for measuring the respective value of things vendible.」という原文に鑑みて、ここでは「それぞれの価値」として引用した。

ここで論じられていることの大枠は、「計算貨幣」とは「同等の部分からなる任意の度量標準 (scale) にほかならない」ということにひとまずなるだろう。それは、諸商品の「それぞれの価値を測定するために発明された」とも述べられており、諸物の「長さ」が物差しで測定されるように、諸商品の価値は、この「計算貨幣」によって測定されるものとして捉えられているとひとまず考えることができる。そして引用の後半部分では、「それゆえ」という接続のもと、「計算貨幣」と「鑄貨」とは別物なのだとされている。

## 1.2 鑄貨の難点

ではなぜ、ステュアートにおいてはこうした二つの貨幣概念が提示されることになったのだろうか。そこには、事物の属性を測定するという問題に対しての、ステュアートの一貫した視角が関係しているように思われる。

金銀複本位制の時代に生きたステュアートにおいてこの問題は、単本位制への抽象がなされた上で考察されているのではなく、現実に存在する複本位制が念頭に置かれた上でいわば実直に分析されている。また、鑄貨の摩滅といった問題にも目配せがなされているため、なぜ金・銀を素材とする鑄貨が諸商品の「価値」を測定する尺度としての適性を欠くのかという問題に対する議論<sup>2)</sup>は、少なからず複雑化されている感が否めないと考えられるのではあるが、以下の言説には、この問題に対する端的な回答が提示されているといえよう。

「それ(金・銀を素材とする鑄貨が「価値」を測定する尺度として適性を欠く理由(引用者)は、鑄貨の造られている物体が商品であり、人間の欲求、競争、および気まぐれによって、その商品の価値が他の諸商品に対して騰落する、ということである。」(Steuart[1767]p.226., 訳 17 頁)

つまり、鑄貨の素材である金・銀は商品として取引され、その「価値が他の諸商品に対して騰落する」がゆえに、「価値」を測定する尺度としては不適合だとされている。

ではステュアートにおいて、事物の属性の測定とはどのようなものとして捉えられているのだろうか。この問題を考えることを通して、「すべての商品にたいして適切で比例的な等価物となりうる、何らかの実体というべきものがこの世になかったとしても存在しうる」のだとされた計算貨幣概念の意味についてまず考えてみたい。

## 1.3 測定するとはどういうことか？

ステュアートは次のように述べている。

「計算貨幣は ここではそれを貨幣と呼ぼう 度、分、秒などが角度に対して、また縮尺が地図あるいは各種の図面に対してはたすのと同じ役割を、諸物の価値に対してはたす。

---

<sup>2)</sup> Steuart[1767]pp.222-8., 訳 13-8 頁を参照。

およそこのような考案物にあっては、単位として常にある名称が採用される。

角度では、それは度であり、地理上の距離ではマイルやリーグ、図面ではフィート、ヤードあるいはトワズ、貨幣ではポンド、リーヴル、グルデンなどである。」(Steuart[1767]p.214., 訳5頁)

ここでは、価値を測定する「計算貨幣」が、角度や長さを測定する「考案物」と同じ役割を果たす旨が述べられ、そうした「考案物」には「単位として常にある名称が採用される」のだとされている。その上で、ステュアートは次のように論じている。

「度は特定の長さをもたないが、同様に図面の単位を示す縮尺という要素も特定の長さをもたない。上述のすべての考案物の有用性は、ただ比率を示すことに限られているからである。

これとちょうど同じように、貨幣単位は、価値のどのような部分とも不変で一定の比率をもちえない。すなわち、それは金、銀あるいは他のいかなる商品の特定の量にも永続的に固定させることができない。」(Steuart[1767]p.214., 訳5頁)

「度 (the degree)」や「図面の単位を示す縮尺 (the scale upon plans which marks the unit)」には「特定の長さ」はなく、「ただ比率を示すこと」がその「有用性 (usefulness)」なのだとされている。つまり 1度 (a degree) や 2度 (two degrees) ではなく、「度なるもの (the degree)」という単位そのものには「特定の長さ」はないとされ、引用の後半部分では「これとちょうど同じように」というかたちで、「貨幣単位 (the unit in money)」への言及に繋がられている。すなわち、「価値のどのような部分とも不変で一定の比率をもちえない」と論じられることによって、「貨幣単位」そのものは、ただ諸商品の 価値 の比率を示すことがその「有用性」であること、たとえば「ポンドなるもの (the pound)」という単位を用いて諸商品の 価値 の比率が示される旨が論じられている。

その後「すなわち」と言葉が続けられ、「それは金、銀あるいは他のいかなる商品の特定の量にも永続的に固定させることができない」とされているのだが、この部分はどのように考えることができるだろうか。確かに事物が有する各属性は、それら各属性を測定する「単位」を用いて示されることによって、その 角度 がいくらなのか、長さ がどれだけなのかが明らかになるように思われる。しかしその際、それら「単位」に対して一定の基準が設けられていなければ、「比率を示す」という目的で行なわれる測定の規律は遵守されえないのであり、ここに、「度量標準」の意義も見出されるように思われる。

たとえば 長さ を測定する場合、それを測定する物差しも 長さ を有しており、長さ で 長さ が測定されるのではあるが、そこに刻まれている基準となる目盛りの〔長さ〕が特定されていなければ、長さ の測定としては意味をなさないだろう。

## 1.4 度量標準の恣意性

こうした問題に対して、ステュアートはどのような回答を寄せているだろうか。引き続きステュアートの議論を見てみよう。

「貨幣というものは、厳密かつ学問的にいえば、すでに述べたように、同等の部分からなる ideal scale である。もし、その 1 つの部分の標準価値とは何であるべきかと問われるとすれば、私は、度、分、秒、の標準的な大きさとは何であるのか、という別の質問を投げかけることで解答とする。」(Steuart[1767]p.217., 訳 8 頁)

ここでは、単なる度量標準 (scale) ではなく、「観念的度量標準 (ideal scale)」というかたちで、「計算貨幣」が「厳密かつ学問的に」規定されている。その含意は後で考察してみることにして、まずは「度量標準 (scale)」が、ステュアートにおいてどのように捉えられているのかという点を見ておこう。

この引用文から読み取れる基本的な視点として、「度量標準 (scale)」には「標準的な大きさ」があるという通念に対しての、ステュアートの懐疑が見出されるように思われる。「度量標準」である「計算貨幣」の「標準的な大きさ」とは何かと問う者に対しては、「別の質問」としてその当の質問者に、「度、分、秒、の標準的な大きさ (the standard length of a degree, a minute, a second) とは何であるのか」という質問を問い返したいとされている。

しかしながらこの問い返しには、円周の  $1/360$  が「1度」、 $1/60$  が「1分」、 $1/3600$  が「1秒」と応じることができる。つまり、「1度」や「1分」や「1秒」の「標準的な大きさ」を示しうる。

ただステュアートにおいても、この回答そのものが誤りとされるわけではなく、回答者からひとまずこの回答を引き出した上で、そうした標準の恣意性を指摘する点に、上記引用文で述べられている問い返しの真意があるようにも思える。ステュアートは続けて次のように論じている。

「それらには標準的な大きさというものが無いのであって、しかも人間がしきたりによってそれに与えるのが適当と考えるもの以外には、何も必要がないのである。しかし、1 つの部分が決定されるや、度量標準の性質によって、残るすべての部分は比例関係に従わざるをえない。」(Steuart[1767]p.217., 訳 8 頁)

つまり、「度量標準」に「標準的な大きさ」がないということの意味は、たとえば「1度」が、超越的に円周の  $1/360$  であるというわけではないということ、それは「人間がしきたりによって」そのように決めたものであることが、ここでは論じられているといえるだろう。

とはいえ「しかし」、ひとたび円周の  $1/360$  を〔1度〕とし、たとえば  $n$  期における乙のつま先から踵までの長さ を〔1フィート〕とした場合には、「度量標準の性質によって (by the nature of a scale)」, その後は、この標準に基づいた分割なり合成なりが行なわれるようになることが引用の後半部分では指摘されている。こうした観点が「計算貨幣」にも適用されて、次のようにス

テュアートは論じる。

「第1歩は全く恣意的であり、人々は、その1つないしそれ以上の部分を、貴金属の正確な量に合わせることで足るであろう。そうして、これがおこなわれ、その貨幣が、金および銀にいわば実現されるや否や、貨幣は新しい定義を獲得する。すなわち、そのとき貨幣は価値尺度とともに代金となるのである。

なんぴとも容易に了解するに違いないが、両金属をこのように価値の度量標準に適合させるからといって、両金属それ自体が、それゆえ度量標準となるべきだということにはならない。」(Steuart[1767]p.217., 訳8頁)

ここでは、「計算貨幣」であるたとえば〔1ポンド〕が、「貴金属の正確な量に合わせ」られる、つまり、たとえば 1gの金の 価値 = 1ポンド という「標準的な大きさ」として規定されると、「貨幣」は「価値尺度 (the measure of value) とともに代金 (price)」という「新しい定義を獲得する」のだとされている。ここまで見てきたところによれば、「計算貨幣」とは、諸商品の価値を測定する「度量標準」として論じられてきたことに鑑みて、ここで獲得するとされている「新しい定義」というのは、「価値尺度」のことではなく「代金」のこととして考えることができる。

ただ、ステュアートにおいて「代金 (price)」は「複雑な概念 (complex idea)」(Steuart[1767]p.65(vol.3)., 訳164頁)とされ、様々な規定が与えられている<sup>3)</sup>。このため、それがどのような意味で用いられているのかを確定することは必ずしも容易ではないが、この部分では、「譲渡可能なあらゆるものの一般的かつ普遍的な等価物」(Steuart[1767]p.65(vol.3)., 訳165頁)というほどの意味として解すことはできるだろう。つまり、1gの金の 価値 = 1ポンド という規定が与えられると、金が「貨幣」として、「価値尺度」であるとともに、「一般的かつ普遍的な等価物」になるという文意として理解しうる。

しかしながら引用の後半部分では、このように理解することに対して若干の注意が促されてもいる。すなわち、金の 価値 なり銀の 価値 なりを「計算貨幣」である〔ポンド〕と結び付けるからといって、そのことから金なり銀なりが、それ自体で「度量標準となるべきだということにはならない」と。言い換えれば、金なり銀なりは、諸商品の 価値 を測定する尺度 (scale) としての適性を欠くということが、ここでは含意されたかたちになっていると見ることができる。

そしてそうした金・銀の不適合性の理由は、先に見た鑄貨の難点に求められるのであった。

## 1.5 ideal scale としての計算貨幣

ここまでの考察からステュアートが計算貨幣概念を、事物の属性を測定する際の「度量標準」という、一般的観点に基づいて導出せんとしている点、そして「度量標準」は人間が恣意的に定めるものであるという点が、ある程度明らかになったと考える。しかしそこからさらに考察されるべきは、ステュアートにおいて、単なる度量標準 (scale) ではなく「観念的度量標準 (ideal scale)」というかたちで、「計算貨幣」が「厳密かつ学問的に」規定されていることの意味になるう。

<sup>3)</sup> Steuart[1767]p.65(vol.3)., 訳164-5頁を参照。

たとえば 角度 を測定する場合、その基準となる〔角度〕が、超越的に円周の  $1/360$  の 角度 を有するものなのかどうかという点については疑問を挟む余地があるとしても、そうした「しきたり」の中に身を置く人間からしてみれば、〔1度〕がどれほどかを実際に示すことはできる。また、たとえば  $n$  期における乙のつま先から踵までの長さ を〔1フィート〕とする「しきたり」の中に身を置く人間も、長さ を測定する際の基準の〔長さ〕として、 $n$  期の乙 の足型なりその写しを提示することができるのであれば、このときこれら「度量標準」は、実在する目盛り (real scale) ということになるだろう。

一方、諸商品の 価値 を測定する際の基準の〔価値〕となる「計算貨幣」(たとえば〔1ポンド〕)を実際に提示しようとする場合、これまで見てきたところによれば、たとえ  $1g$  の金の 価値 を基準の〔価値〕にするという「しきたり」を設けるとしても、金の 価値 が変動してしまうとしたら、それを基準にして測定される諸商品の 価値 は、刻まれた目盛りが測定のたびに伸縮してしまう物差しによって測られた 長さ と変わらないことになってしまうだろう。

このように問題が捉えられることによって、「計算貨幣」は「いかなる物体にも固着させることができない」(Steuart[1767]p.219., 訳 10 頁),つまり 実在する目盛り としては提示できないと考えられよう。しかしながら、現実には諸商品の 価値 は ポンド を用いて測定されているのだから、測定 の特性に鑑みて、その基準となる〔1ポンド〕には、たとえ現実に提示することはできないとしても、その「標準的な大きさ」が存在するはずだと考えざるをえないということにもなるだろう。ここから、「計算貨幣」は諸商品の 価値 を測定する「度量標準」ではあるが、単なる「度量標準」ではなくて「観念的度量標準」、つまり 観念的な目盛り (ideal scale) として提示されることになったのではないかと推察しうるように思われる。

つまり、測定するとは比率を示すこと、そして正しく比率を示すためには、その「標準的な大きさ」を人間が「しきたり」によって決定する必要があるということ、こうした尺度観に一種厳格に従うことから推論された概念として、ステュアートによる ideal scale としての「計算貨幣」論を位置付けることができるように思われる。

## 2 マルクスのステュアート評

### 2.1 マルクスのステュアート評 妥当な側面

以上のようにステュアートの計算貨幣論を捉えてみた場合、諸商品の 価値 を測定するという問題を引き受け、ステュアートとは異なった観点から考察を行なったように見える論者として、マルクスを挙げることができる。

マルクスは『経済学批判』において、貨幣の価値尺度機能の考察を行なった後に「B 貨幣の度量単位についての諸理論」という項目を立て、価値の尺度と価格の度量標準に対する他学説の批判を展開している。その中で、「ばかげた諸理論 (die tollsten Theorien)」(Marx[1859]S.55., 訳 85 頁)としてまとめられた「貨幣の観念的度量単位説」(Marx[1859]S.60., 訳 93 頁)が、ステュアートにおいて完全なかたちで展開されているのだという。

# 4)

ステュアートの議論に対して、マルクスは次のような論評をまず行なっている。

「もし種々の商品がそれぞれ一五シリング、二〇シリング、三六シリングというように価格表に記入されているならば、それらの価値の大きさの比較のためには、銀の実質もシリングという名称も、實際上私にはどうでもよいのである。一五、二〇、三六という数的比率がいまやすべてを語っており、一という数字が唯一の度量単位となっている。比率の純粹に抽象的な表現は、一般にただ抽象的な数的比率そのものであるにすぎない。だから首尾一貫するためには、ステュアートは、たんに金銀だけでなく、それらの法律上の洗礼名をも放棄すべきであった。」(Marx[1859]S.63., 訳 100 頁)

熏だ手て匹辨末比琉極に諸薦轟の價權が、「銀一五シリング、二〇シリング、三六シリング」という「抽象的な数的比率」がすでに判明しているのだから、この場合には「銀の実質もシリングという名称」も「どうでもよい」のだとされている。そしてこのときの「度量単位 (Maßeinheit)」として「一という数字」<sup>4)</sup>が挙げられた上で、ステュアートへの論評が行なわれている。すなわち、ステュアートが「首尾一貫する為には」、自らの「計算貨幣」概念から金銀だけではなく、「貨幣単位」をも放逐すべし。

「彼は、価値の尺度の価格の度量標準への転化を理解していないので、当然に、度量単位として役だつ一定量の金は、尺度として他の金量に関係しているのではなく、価値そのものに関係していると信じる。」(Marx[1859]S.63., 訳 100 頁)

ステュアートにおいては、金の 価値 が変動してしまうということから、1g の金の 価値 = 1 ポンド といった「度量標準」は設定しえず、観念的な目盛りとしての〔1 ポンド〕が提示されることになったのではないかと考えられた。しかしここではマルクスによって、1g の金 = 1 ポンド という考え方が対置されているといえるだろう。そのためには、「価値の尺度の価格の度量標準への転化」を理解する必要があるのだとされている。

ここでいわれている「価値の尺度」というのは、たとえば 1kg の小麦の 価値 が 1g の金によって測定されるというように、商品の 価値 は他の商品の 使用価値 によって表現されるということであろう<sup>5)</sup>。問題は、そうした「価値の尺度」が「価格の度量標準」に転化するとされていることの意味になるが、これは基本的には、「いろいろな金量として、諸商品の価値は互いに比較され、計られるのであって、技術上、それらの度量単位としてのある固定された金量に関係させる必要が大きくなっていく」(Marx[1867]S.112., 訳 (1)176-7 頁) という、技術上の問題として捉えることができる。

たとえば 1g の金を 1 ポンドと呼び、その分割部分にそれぞれの名称を充てておくことが技術上必要になってくるということであり、「価値尺度の価格の度量標準への転化」という意味は、このように解することができるだろう。言い換えれば、マルクスにとって「価格の度量標準」は、基準の重さとなる金の一定重量に対する「単位」の命名に過ぎないのであり、その意味からすれば「価格の度量標準」は、論理的には説く必要がないものとして捉えられていると見うる。

とすれば、ここでマルクスはステュアートに対して、「貨幣単位」とは何かという問題、諸商品の価格がなぜ「それぞれ一五シリング、二〇シリング、三六シリングというように」示されることになるのかを考えなければならないのではないかと問うていると見ることができるだろう<sup>6)</sup>。

## 2.3 一見すると奇妙なマルクスの測定観

しかしながら、マルクスによって提示されている、商品の 価値 が他の商品の 使用価値 によって表現されるという考え方は、見ようによっては 角度 が 重さ によって測定されるといった、奇妙な見解であると反論することもできなくはない。角度 は基準となる〔角度〕に基づいて、そして 重さ は基準となる〔重さ〕に基づいて測定されるとすれば、価値 も基準とな

<sup>5)</sup> たとえば『経済学批判』では次のように述べられている。

「一商品の交換価値は、その商品自身の使用価値には現われない。けれども一般的社会的労働時間の対象化として、一商品の使用価値は、他の諸商品の使用価値と関係づけられる。こうしてある一商品の交換価値は、他の諸商品の使用価値で自己をあらわす」(Marx[1859]S.25., 訳 39 頁)。

ここでは「一商品の交換価値」は、他の商品の「使用価値」で表わされるとされているが、後に『資本論』では、一商品の「価値」は他の商品の「使用価値」で表現されるとされ、それがこの商品の「交換価値」として整理されるに至る。

<sup>6)</sup> その成果が、後に価値形態論として提示されることになる。



る〔価値〕に基づいて測定されるということになりそうであり、そこには 使用価値 が入り込む余地はなさそうにも思える。

## 2.4 マルクスのステュアート評 疑問な側面

しかしマルクス自身においても、価値 を測定するのは〔価値〕であること、そしてその価値に対する考察を、自らは行なっているという点についての自負を、以下の言説から汲み取ることができる。

「諸商品はそれらの交換価値の価格への転化によって、同名の大きさとして現われることから、彼は、それらの商品を同名のものにする尺度の質を否定する。」(Marx[1859]S.63., 訳 100 頁)

この部分の解釈は微妙だが、マルクスにおいては、諸商品の「交換価値の価格への転化」、つまり 20 エレのリンネル = 1 ポンド (= たとえば 1g の金) という価格の根底に、たとえば 20 エレのリンネル = 1 着の上着 という交換価値の関係が想定される。その一方で、ステュアートの議論においては、諸商品が「同名」の ポンド を用いて比較されるのはなぜなのか、という問題に対する考察が抜け落ちておりマルクスによって捉えられたことから、「彼は、……尺度の質を否定する」と論評されているのではないかと筆者は考える。要するに、「いろいろなものの大きさはそれらが同じ単位に還元されてからはじめて量的に比較されうようになるということ」(Marx[1867]S.64., 訳 (1)96 頁)、この問題が、ステュアートにおいては見落とされているという点を指摘することが、マルクスの念頭に置かれているのではないかと推察できるように思われる。

しかしながら、ステュアートの議論においても、そもそも諸商品の側に測定される 価値 が存在しなければ、「計算貨幣」を用いてその 価値 を測定することはできないと考えることもできるのだから、ステュアートが「尺度の質を否定」していたという断定は、必ずしもできるものではない。このため、上記引用文をこのように解釈する場合には、この部分には首肯し難い部分が残される。

## 2.5 マルクスにおけるステュアート評の意味

とはいえマルクスにしてみれば、このようにステュアートを論評しておくことによって、自らの理論には諸商品を「同名のものにする尺度の質」に関する議論が存するという点を強調せんがための文言と見ることもできなくはない。マルクスにおいて諸商品を「同名のものにする尺度の質」とは、『経済学批判』に即して見てみるならば、「一般的人間的労働」(たとえば [1859]S.24., 訳 37 頁)、「一般的社会的労働」(たとえば [1859]S.17., 訳 27 頁)といった用語で表現される「労働」ということになる。この点については、たとえば次のように述べられている。

「一般的人間的労働というこの抽象は、あるあたえられた社会のそれぞれの平均的個人がなしうる平均労働、人間の筋肉、神経、脳等々のある一定の生産的支出のうちに実在してい

る。それはすべての平均的個人が慣れればおこなうことのできる，そして彼らがなんらかの形態でおこなわざるをえない単純労働なのである。この平均労働の性格は，国が違い文化段階が違うにしたがって異なるとはいえ，ある既存の社会ではあたえられたものとして現われる。」(Marx[1859]S.18., 訳 29 頁)

ここでは，後の『資本論』において，「抽象的人間労働」という用語のもとで論じられている事柄とほぼ重なる事柄が述べられているといえるだろう。もっとも，「経済学の理解にとって決定的な跳躍点」(Marx[1867]S.56., 訳 (1)83 頁)とマルクス自身によって考えられた「労働の二重性」の把握，具体的には価値の実体として規定される「抽象的人間労働」がいかなる概念なのかという点をめぐっては，膨大な研究が蓄積されているのであって，マルクスの真意を度外視してマルクスの叙述の表層をなぞるのは，皮相なマルクス理解に繋がるという見解も提示されている。

このため，「一般的人間的労働」，「一般的社会的労働」，また「抽象的人間労働」といった用語に関する言説を，交換関係を度外視して解釈することには一定の注意が必要にはなろう。しかしステュアートの議論への対置という観点から見ると，マルクスの議論の含意は明確なものとして捉えることもできる。

つまり 価値 が 使用価値 によって表現されるというとき，それは 角度 が 長さ によって測定されるといった奇妙な事態が意味されているわけではない。価値 は〔価値〕であるところの「一般的人間的労働」によって測定される。なぜなら，「交換価値を生みだす労働」(たとえば Marx[1859]S.19., 訳 30

### 3.2 尺度の質の実在性を求めて

しかしながらマルクスが、「何らかの実体というべきものがこの世になかったとしても存在する」のだという、ステュアートによって提示された観念的な「計算貨幣」なる概念に与することはなかった。

「商品価値の金による表現は観念的なものだから、この機能のためにも、ただ想像されただけの、すなわち観念的な、金を用いることができる。商品の番人が誰でも知っているように、彼が自分の商品の価値に価格という形態または想像された金形態を与えても、まだまだ彼はその商品を金に化したわけではないし、また、彼は、何百万の商品価値を金で評価するためにも、現実の金は一片も必要としないのである。それゆえ、その価値尺度機能においては、貨幣は、ただ想像されただけの、すなわち観念的な、貨幣として役立つのである。この事情は、まったくばかげた理論が現われるきっかけになった。価値尺度機能のためには、ただ想像されただけの貨幣が役立つとはいえ、価格はまったく実在の貨幣材料によって定まるのである。」(Marx[1867]S.111., 訳(1)173-4頁)

価格表示をもって価値尺度とするかどうかという点については検討の余地が残されるものの、ここには、貨幣の観念性という問題に対するマルクスの見解が特徴的に示されているといえるだろう。諸商品に価格が付されるときには、貨幣は個々人の頭の中で想像されるだけでよいとされている。しかし、そうした想像がそもそも可能であるのは、「実在の貨幣材料」が存在するからなのだとされている。マルクスにおいては、貨幣の観念性を論じる前提としての貨幣の実在性が、言い換えれば貨幣商品の存在が不動のものとして据え付けられていると考えられる。

それは、諸商品に具わる「尺度の質」は観念的なものではありえず、マルクスにおいては「抽象的人間労働」というかたちで実在性を与えられた、彼の価値概念に遡って発せられる計算貨幣論への対論であるようにも思える。

### 3.3 価値の観念性について

とはいえ、計算貨幣論が提示されたステュアートにおける「鑄貨としての貨幣」にも、印象的な位置付けがなされている。

「鑄貨がさまざまな不都合を被りやすいからといって、鑄貨を全く排除し、すべてを観念的な度量標準に変えるように提案することは、自分より身長が高い人々の一部を切りおとしたり、あるいは自分より身長が低いと思われる人の手足を無理やり引き延ばしたりして、あらゆる人の身長を自分の寝台の長さに合わせるようにした、暴虐者の振舞いに似ている。」(Steuart[1767]p.229., 訳19頁)

鑄貨には、価値を測定する「度量標準」としての適性を欠く面があり、理論的には価値を測定する「度量標準」として、「観念的(ないし理想的)度量標準」である「計算貨幣」を想定せざるをえ

ないとしても、それをそのまま現実の経済に適用せんとする提案を行なうならば、それは「暴虐者の振る舞いに似ている」のだとされている。ここからステュアートは、「鑄貨を全く排除」する方策ではなく、鑄貨を温存しつつ、「鑄貨を観念的な計算貨幣という不変の尺度にできるだけ近づける」(Steuart[1767]p.228., 訳 19 頁) 提案を行なっていくことになる。

上記引用文で述べられている「観念的な度量標準」というのは、「何らかの実体というべきものがこの世になかったとしても存在しうる」のだとされた、計算貨幣のことを指す。その意味するところとは要するに、商品の使用価値と一組のものとして提示される価値ではなく価値そのもの、つまり、商品の使用価値からは独立した存在としての 価値 が、理論的には提示しうるということであろう。

ステュアート自身は、経済運営上の現実性という観点から、自らが提示した価値の観念性という論点の突き詰めに対しては逡巡しているように思われる。そのことは、「暴虐者の振る舞いに似ている」という文言に込められているように思える。では、経済運営上の現実性という観点をひとまず措くとしたとき、価値の観念性という論点を推し進めることによって論じうる問題とは何だろうか。

### 3.4 覚書

- 価値増殖の場として流過程を捉えることもできるようになるのではないか？
  - $G \quad W \quad G'$  における、買われるときの商品の 価値 と売られるときの商品の 価値
  - $W_1 \quad G \quad W_2$  における、 $W_1$  を買うときの貨幣の 価値 と  $W_2$  を買うときの貨幣の 価値

## 参考文献

- [1] Steuart, James [1767] *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*. Edited by Andrew. S. Skinner, with Noboru Kobayashih and Hiroshi Mizuta, Vol. 2-3. Pickering & Chatto, 1998 (小林昇監訳『経済の原理 第3・第4・第5編』名古屋大学出版会, 1993年)
- [2] Marx, Karl [1859] *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*. in *Marx-Engels Werke*, Band 13, Dietz Verlag, Berlin, 1961 (杉本俊朗訳『経済学批判』国民文庫, 1966年)
- [3] Marx, Karl [1867] *Das Kapital*. vierte Auflage. in *Marx-Engels Werke*, Band 23, Dietz Verlag, Berlin, 1962 (岡崎次郎訳『資本論』国民文庫(第1-3分冊)1972年(なお、引用に際して第1分冊の5頁を挙げる場合には「訳(1)5頁」と表記した))